

英文学者夏目漱石年譜

年号	西暦	年齢	関連事項
慶応三年	1867	0	2月9日(陰暦1月5日)、江戸牛込馬場下横町(現:新宿区喜久井町)に生まれる。本名、金之助。
明治十年	1877	10	4月、江戸幕府設立の学校を引き継いだ東京開成学校その他を基にして東京大学発足。その付属として東京大学予備門発足。
明治十二年	1879	12	3月、東京府第一中学校正則科に入学。当時、府中は正則科と変則科に分かれ正則は中学課程での完成をめざして日本語で授業、変則は大学予備門入学を前提として英語中心。大学予備門を目指す、漱石は不登校状態だったらしい。
明治十四年	1881	14	この春までには中退していて、4月ごろ(推定)、漢学塾の二松学舎に入学、漢文に打ち込む。
明治十五年	1882	15	夏ごろまでに二松学舎を退学。 10月、東京専門学校(後の早稲田大学)開校。
明治十六年	1883	16	9月ごろ(推定)、大学予備門受験準備のため成立学者に入学、英語学習に打ち込む。
明治十七年	1884	17	9月、東京大学予備門予科に入学。同年入学に正岡子規がいた。
明治十九年	1886	19	3月、帝国大学令公布。東京大学は工部大学校と合わせて帝国大学となる。 工部大学校で教えていたジェームス・メーン・ディクソン、帝国大学文科大学教師となる。 4月、東京大学予備門は第一高等中学校となる。 7月、腹膜炎のため進級試験を受けられず落第。しかしこの時から発奮して勉学に集中、卒業まで首席を通す。
明治二十年	1887	20	帝国大学文科大学に英文科開設。
明治二十一年	1888	21	9月、第一高等中学校本科第一部(文科)に進学、英文学を専攻。

明治二十二年	1889	22	<p>1月ごろ、正岡子規との交際始まる。</p> <p>5月、子規が和漢詩文集「七艸集」を完成、友人に回覧。この後、咯血して肺結核と診断される。漱石、「七艸集」の「評」を書き、九首の漢詩を添えて返却、初めて「漱石」と署名。</p> <p>8月、学友とともに房総に旅行。9月、この時の漢詩文紀行「木屑録」を脱稿、松山に帰省中の子規に送る。子規、これを絶賛。</p> <p>12月から翌年にかけて、「オリジナルの思想」「文章」をめぐる、子規と手紙で論争。</p>
明治二十三年	1890	23	<p>6月(推定)、英語教師ジェイムズ・マードックに提出のレポート“Japan and England in the Sixteenth Century”を書く。この「あとがき」の部分が雑誌「みゆーぜあむ」(7月)に掲載される。</p> <p>7月、第一高等中学校本科を卒業。</p> <p>9月、帝国大学文科大学英文科に入学。主任教師はジェイムス・メーン・ディクソン。二年上に立花政樹がいるだけで、二人目の英文科学生だった。</p> <p>9月、東京専門学校、文学科(翌年文学部)を開設。慶応義塾も文学部を設け文学科を開設。</p>
明治二十四年	1891	24	<p>8月、森鷗外の小説をめぐる子規と手紙で論争、自分が「洋文学の隊長とならん事思ひも寄らぬ」と自嘲。</p> <p>11月、子規の「気節」論をめぐる手紙で論争。</p> <p>12月、ディクソンの依頼で「方丈記」を英訳。</p>
明治二十五年	1892	25	<p>5月、東京専門学校講師となる(明治28年3月まで)</p> <p>6月、比較宗教及び東洋哲学のレポートとして「老子の哲学」を書く。</p> <p>8月、夏休みを利用して松山に子規を訪ねる。この時、高浜虚子、河東碧梧桐らに会う。</p> <p>9月、5月に辞職してアメリカに去ったディクソンの後任としてオーガス・ウッド(ウッド)着任。</p> <p>10月、「文壇に於ける平等主義の代表者「ウォルト、ホイットマン」の詩について」を「哲学雑誌」に発表。この頃、オーガス・ウッド「詩伯「テニソン」を邦訳、「哲学雑誌」(12月～26年3月)に掲載。</p> <p>12月、大学を中退した正岡子規、新聞「日本」に入社。</p>
明治二十六年	1893	26	<p>1月。英文学談話会で「英国詩人の天地山川に対する観念」を講述、「哲学雑誌」(3-6月)に掲載。</p> <p>7月、帝国大学を卒業。大学院に入り、形としてウッドの指導を受ける。</p> <p>10月、第一高等中学校と高等師範学校から「引っぱり尻」で就職話があり、結局、後者の英語囑託講師となる。</p>

明治二十七年	1894	27	この年の初めごろ、「尋常中学英語教授法方案」まとめる。
明治二十八年	1895	28	4月、愛媛県尋常中学校の嘱託講師となって松山に赴任。 6月、二階建て離れ屋の下宿に移り、愚陀仏庵と称する。8月、松山に帰った子規がその階下にて下宿、俳句指導を行う。二階に住む漱石もしばしばその運座に参加。 俳句熱盛ん。
明治二十九年	1896	29	4月、第五高等学校講師(7月に教授)となって熊本に赴任。 6月、中根鏡(鏡子)と結婚、新居を構える。 9月、ラフカディオ・ハーン、帝国大学文科大学英文科教師となる。(明治36年3月まで)
明治三十年	1897	30	3月、「トリストラム、シャンデー」を「江湖文学」に発表。 6月、京都帝国大学設立。従来の帝国大学は東京帝国大学と改称。
明治三十二年	1899	32	4月、「英国の文人と新聞雑誌」を「ホトギス」に発表。 8月、「小説エイルキンの批評」を「ホトギス」に発表。
明治三十三年	1900	33	6月、文部省給費留学生として2年間の「英国留学」を命ぜられる。 9月8日、ドイツ船プロイセン号で横浜を出帆、ドイツに留学する藤代禎帆輔(独文)芳賀矢一(国文)らが同行。 10月19日、ジェノヴァ港に到着、陸路パリに向かう。パリ万国博覧会などを見学して28日、ロンドンに到着。 11月1日、ケンブリッジに赴くが、ここでの研究は断念。 11月7日、ロンドン大学のウィリアム・P・ケア教授と会い、その講義を聴くことにする(12月末頃まで) 11月22日、ケア教授の紹介でシェクスピア学者ウィリアム・J・クレイグから個人教授を受けることにする(週1回、翌年10月ごろまで)
明治三十四年	1901	34	4月、子規(および虚子)に宛て長い手紙を書き、これが「倫敦消息」として「ホトギス」(5月6月)に掲載される。 5月、化学者の池田菊苗が来て約一か月半同宿、意気統合する。 7月、この頃から一念発起して社会学、心理学などの本を読みあさり、開化の法則と文学との関係とかの「科学的」研究に没頭。
明治三十五年	1902	35	3月、中根重一宛ての手紙で壮大な研究計画を洩らす。 9月、この頃、強度の神経衰弱に悩む。 9月19日、正岡子規死去(高浜虚子、河東碧梧桐から手紙で11月に知らされる) 10月、スコットランドに旅行、ピトログリに遊ぶ。 この頃、日本に「夏目狂セリ」の噂。 11月5日、日本郵船・博多丸でロンドンを出帆、帰国の途につく。

明治三十六年	1903	36	<p>1月23日、神戸に上陸、東京に向かう。</p> <p>3月、第五高等学校を辞職</p> <p>4月、東京帝国大学文科大学講師、および第一高等学校英語嘱託(講師)となる。文科大学の英文科では初の日本人講師として英語講読「サイラス・マーナー」および「英文学概説」の講義(後に単行本「英文学形式論」を受け持つ。</p> <p>6月、「自転車日記」を「ホトギス」に発表。</p> <p>この頃、神経衰弱悪化、鏡子と2カ月ほど別居。</p> <p>7月初め頃、大学を辞める旨、学長に申し出たが説得されて撤回。</p> <p>9月、新学年になり、「英文学概説」の講義(2年間続けて、後の単行本「文学論」を始める。英語講読は「マクベス」などシェクスピアの作品の講読を始め、非常に人気を得る。</p>
明治三十七年	1904	37	<p>1月、「マクベスの幽霊に就いて」を「帝国文学」に発表。</p> <p>5月、「小羊物語に題す十句」を執筆</p> <p>11月末頃、高浜虚子主宰の「山会」で朗読する文章「猫伝」を執筆。虚子が朗読して好評で、改題補筆。</p>
明治三十八年	1905	38	<p>1月、「吾輩は猫である」を「ホトギス」に発表、1回完結のつもりであったが、好評のため続編を書き継ぎ、翌年の8月まで断続連載。</p> <p>またこの年、「倫敦塔」を「帝国文学」(1月)、「カーライル博物館」を「学燈」(1月)「幻影の盾」を「ホトギス」(4月)、「琴のそら音」を「七人」(6月)、「一夜」を「中央公論」(9月)、「薙露行」を「中央公論」(11月)に発表、一躍、作家としての名声を確立。</p> <p>9月、「十八世紀英文学」の講義(2年間続けて、後の単行本「文学評論」を始める。</p> <p>10月、「吾輩ハ猫デアル」上篇刊行。</p> <p>10月、上田敏「海潮音」刊行。」</p>
明治三十九年	1906	39	<p>1月、「趣味の遺伝」を「帝国文学」に発表。</p> <p>4月、「坊っちゃん」を「ホトギス」に発表。</p> <p>5月、短編集「漾虚集」刊行</p> <p>7月、狩野亨吉から、京都帝国大学に新設される文科大学の教授を依頼されるが辞退。</p> <p>9月、「草枕」を「新小説」に発表。作家としての地位を固める。</p> <p>9月、イギリス人ジョン・ローレンス、東京帝国大学文科大学教師に着任、英語英文学を教え始める。また授業に加えて「セミナー」による指導を推進。</p> <p>10月、読売新聞から入社の話があったが、熟慮の末に辞退。</p> <p>11月、「吾輩ハ猫デアル」中編刊行。</p> <p>11月4日、「文学論」序を「読売新聞」に発表。この頃、創作の筆を中断して、「文学論」原稿の訂正・補筆に専念。</p>

明治四十年	1907	40	1月、「野分」を「ホトギス」に発表。短編集「鶉籠」刊行。 2月、朝日新聞社から入社打診。3月、主筆池辺三山と会い、入社を決意。 3月、東京帝国大学および第一高等学校を辞職 4月、朝日新聞社に入社。 5月、「文学論」刊行 5月、「吾輩ハ猫デアル」下編刊行。 6月、朝日新聞社入社第一作「愚美人草」を連載（～10月）
明治四十一年	1908	41	9月、「朝日新聞」に「三四郎」を連載（～12月） 11月、上田敏、京都帝国大学文科大学に新設された英文科の講師（翌年5月、教授）に就任。
明治四十二年	1909	42	3月、「文学評論」刊行。
明治四十三年	1910	43	この年、慶応義塾のいわゆる「文科大刷新」。沈滞していた文学科を復興すべく、森鷗外を顧問として、まず漱石、次いで上田敏がその中心者に擬せられたが、結局、永井荷風がその任に就く。
明治四十四年	1911	44	2月、文部省より文学博士号授与の沙汰があったが辞退。 8月、大阪朝日新聞社の依頼で関西に講演旅行、「現代日本の開化」「文芸と道徳」など
大正三年	1914	47	11月25日、学習院で「私の個人主義」と題して講演。
大正五年	1916	49	12月9日、死去。